

《論文》

学生と対象者との人間関係が
職業的アイデンティティに及ぼす影響

上田 雪子

学生と対象者との人間関係が 職業的アイデンティティに及ぼす影響

上田 雪子

和文抄録：本研究の目的は、学生と対象者との人間関係が職業的アイデンティティに及ぼす影響を明らかにすることである。その結果、1. 学生は対象者と人間的信頼関係を築くことができた。2. 人間的信頼関係は看護職としての専門性への信頼感を高める。3. 学生が対象者との人間的信頼関係を築くことができるならば職業的アイデンティティを高めることが示唆された。

キーワード：対象者—学生関係、職業的アイデンティティ、対象—看護者関係評価尺度（CNRS）

I.はじめに

正規雇用看護職員離職率は2016年度で10.9%、新卒看護職員離職率は7.6%と、看護職の離職率の高さが医療現場の課題の一つである¹⁾。看護師としてのキャリアを継続していくためには、看護師養成教育のなかで看護師としてのアイデンティティの形成が不可欠である。看護師の職業的アイデンティティは、学生のうちから形成され、特に臨地実習をとおして徐々に形成される^{2) 3)}。学生は、臨地実習をとおして様々な学びをしており、この臨地実習からの学びが、学生の職業的アイデンティティ形成に影響を与えている^{4) 5) 6)}。対象者と看護師の対人関係の形成におけるコミュニケーションは看護実践を左右する。そのため看護師のコミュニケーションのあり方が重要になる。つまり、医療におけるコミュニケーションは、ただ対象者と会話ができることではなく、対象者の考えや思いを導きだし対象者のニーズに応じていくことである。それには、専門的なコミュニケーションと対象者に立場にたって、他者との違いを理解しながら関係性をつくっていくことが必要になる。文部科学省⁷⁾は、看護実践の基本的能力としてヒューマンケアの基盤的能力を求めており、ヒューマンケアの基本に関する実践能力のなかで、多様な年代や立場の人との人間関係を築きながら看護実践をとおして援助的人間関係へと発展させていくことであると報告している。また、厚生労働省⁸⁾もヒューマンケアの基本的な能力のなかで、援助的関係の形成の能力をあげている。これらのことは看護のヒューマンケアとしてのコミュニケーションのあり方を示しているといえる。さらに、対象者と看護師の関係性は、メッセージの受け手と送り手の双方向のやりとりする相互作用によって成り立っている。しかし、昨今の電子メディアの普及の進歩は著しい現状もあって対面という点からは、コミュニケーションに必要な相互作用は成立しにくく対象者を前にした対人面へのコミュニケーションが危ぶまれていることも報告されている⁹⁾。先行研究において、学生のコミュニケーション能力は看護実践との関連から臨地実習をとおして対象者との人間関係形成ができることが報告されている¹⁰⁾。このように、臨地実習からの学びを深めるためには、臨地実習指導に加えて、実習事前指導が重要と考えられる。A校においては、職業的アイデンティティ形成に配慮した実習事前指導を行い、対象者との人間関

係を成立させるコミュニケーション技術やプロセスレコードを用いて対象者との関わりについて、学生自身の態度の振り返りをさせるなど、コミュニケーション能力の育成に力を注いでいる。臨地実習において、コミュニケーション技術を活用し、看護実践や臨地実習指導者との関わりをとおして、学生のコミュニケーション能力が向上し、かつ、学生が成功体験や自信をもつ体験をすることができるならば、実習後の職業的アイデンティティ形成にも影響を及ぼすと考えられる。学生が看護実践を効果的に展開するためには、良好な対象者—学生関係が成立していることが必要である。また、看護ケアの効果は、患者—看護者関係が良好であればさらに効果的であると報告されている¹¹⁾。臨地実習において対人関係を評価することは、看護実践の効果をあげるために意義がある。深井ら¹²⁾は、対象—看護者関係を評価する尺度を用いて、学生を対象に調査した結果、この尺度は患者—看護者関係のみならず、それ以外の人間関係も評価できること、また経時的な人間関係の変化と、評価者のアイデンティティや状況の違いによる人間関係の評価を的確に反映する尺度であることを報告している。

看護師としての職業的アイデンティティの発達は看護師養成課程への入学前の進路選択の段階から始まり、看護教育をとおして徐々に発達するため、対象者—学生関係と職業的アイデンティティとの関連性を検討することは、職業的アイデンティティの積極的な発達を早期の段階から促進するためにも重要と考える。しかし、これまでの研究では、対象—看護者関係を評価する尺度を用いて、対象者—学生関係と臨地実習後の職業的アイデンティティ形成に与える影響を量的に明らかにした研究は少なく¹²⁾、高等学校とその専攻科における5年間の一貫教育による看護師教育課程の学生を対象に、臨地実習の職業的アイデンティティ形成に焦点をあてた研究は見当たらなかった。そこで本研究では、対象者—学生関係が臨地実習後の職業的アイデンティティ形成にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究目的

学生と対象者との人間関係が職業的アイデンティティに及ぼす影響を明らかにする。

III. 研究方法

1. 用語の定義

- 1) 対象者—学生関係とは、言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーションにより対象者—学生との関係性のなかで、看護実践をとおして相互作用が築かれていくことである。
- 2) 職業的アイデンティティとは、看護職選択への自信、自分なりの看護師観、看護職の専門性によって医療に貢献できるという自負、看護師として社会に貢献しようという意欲を持つことである¹³⁾。

2. 臨地実習の概要

基礎看護学実習の目的及び目標を表1・表2に示した。

表1 基礎看護学実習の目的

-
1. 看護におけるコミュニケーションの意味を知り、看護を行う上で基本となるコミュニケーション技術を学ぶ。
 2. 健康障害が患者の生活にどのように影響しているのか、患者をとらえ、基本的な看護過程の展開技法を身につける。
 3. 看護師としての探求的態度を養い、学生らしい節度ある態度を身につける。
-

表2 基礎看護学実習の目標

1. 患者とのコミュニケーションをもつことができ、人間関係を築ける。
2. 受け持ち患者の情報をヘンダーソンの看護の視点に沿って収集し、未充足なニーズをみいだすことができる。
3. 未充足なニーズについてアセスメントを行い、看護上の問題を抽出できる。
4. 日常生活行動に関する看護上の問題について看護計画を立案することができる。
5. 日常生活行動の援助が安全、安楽に実施できる。
6. 看護計画の評価・修正ができる。
7. 保健医療福祉チームの一員として関わることにより、看護師としての責任を理解できる。

実習時期は4年次3月の3週間、実習形態は各病棟に学生4～5名を配置している。指導形態は教員10名で7病棟を担当し各病棟1名～2名の教員を配置している。基礎看護学実習場所は地域の医療を担う某病院の2か所である。対象者は65歳以上の高齢者である。

職業的アイデンティティ形成に配慮した実習事前指導のねらいは、1) 看護の対象である人間の理解を深め、看護の多様性と看護実践能力を養う、2) 保健医療福祉チームの一員として臨地実習に臨む、3) 臨地実習をとおして学生自身の課題を考える。方法は、1) 受け持ち対象者に応じた看護過程の展開をとおして、対象者との人間関係を成立させるコミュニケーション技術を、看護専門職として学ぶ意義について認識させる。2) 対象者との関わりについては、基礎看護学実習の1週目と2週目にプロセスレコードをとり、学生自身の態度の振り返りをするにより、看護専門職となるものであるという自覚をもたせる。

3. 調査対象者

A 高等学校看護専攻科4年生31名

4. 調査期間

X年2月～3月の基礎看護学実習期間中

5. 調査方法

1) 調査手順

質問紙は、調査目的・方法、プライバシーの保護などに関する説明を行い、調査対象者に手渡し回収した。

2) 調査内容

質問紙調査は、年齢、性別、対象者—学生関係、職業的アイデンティティの質問項目で構成した。以下、CNRS因子と職業的アイデンティティ尺度の下位因子を【 】、項目を「 」で示した。

(1) 対象者—学生関係

対象—看護者関係評価尺度 (Client-Nurse Relationship Scale11) (以下、CNRS) は対象者—看護者関係を評価する尺度で、第1因子【人間的信頼感】(10項目)、第2因子【威圧感】(8項目：逆転項目)、第3因子【専門性への信頼感】(6項目)の3因子24項目を測定する尺度である(表3)。

表3 対象—看護者関係評価尺度 (CNRS)

第1因子【人間的信頼性】	第2因子【威圧感】	第3因子【専門性への信頼感】
1. 親切だ	1. おこりっぽい	1. 人間的に魅力がある
2. 挨拶や礼をきちんと言う	2. 理屈っぽい	2. 想像力に富む
3. こちらの話を聞いてくれていると感じる	3. 決定を強要する	3. 機転が効く
4. 本当に分かってくれていると感じる	4. 反対されるとすぐに攻撃的になる	4. 有能な人だと思う
5. 自分の秘密を安心して打ち明けられる	5. 優越感を抱いているのが分かる	5. 役立つ知識を提供してくれる
6. 自分が訴えていることについて全部調べてくれる	6. 議論をふっかけるように話す	6. 話が興味深い
7. プライバシーが守られているか不安を感じる	7. 理解できない専門用語を使うことがある	
8. よく目をあわせて話してくれる	8. 威圧的である	
9. やさしい		
10. 丁寧に説明してくれる		

CNRSのCronbach, $s\ a$ 係数は0.88が検討された信頼性・妥当性のある尺度である¹¹⁾。評価は4段階のリッカートスケール（大いにそうである：3点～全然そうでない：0点）で得点化し、総得点は72点満点（第1因子：30点、第2因子：24点、第3因子：18点）である。得点が高い程その特徴を示す。CNRSは対象者側から看護者を評価する質問内容で構成されているが、本研究では、同じ質問紙を用いて、学生による受け持ち対象者の自分に対する評価の推測評価を、14日間の基礎看護学実習期間中3回（前期：受け持ち3日目、中期：受け持ち7日目、後期：受け持ち14日目の基礎看護学実習終了日）調査した。

(2) 実習後の職業的アイデンティティ

看護学生用職業的アイデンティティ尺度¹³⁾（以下、職業的アイデンティティ尺度）は、【看護職選択への自信】（5項目）、【自分の看護職観の確立】（5項目）、【看護職として必要とされることへの自負】（5項目）、【社会貢献への志向】（5項目）の4因子20項目から構成され、Cronbach, $s\ a$ 係数は0.94が検討された信頼性・妥当性のある尺度である¹³⁾。評価は7段階のリッカートスケール（まったくあてはまらない：1点～非常にあてはまる：7点）で得点化し、得点が高い程その特徴を示す。基礎看護学実習（以下、実習）終了日1回調査した。

7. 分析方法

年齢、性別、CNRS因子得点の記述統計量を算出し、前期・中期・後期のCNRS因子得点の経時的変化はFriedman検定を用いて分析した。職業的アイデンティティ尺度の下位因子得点は、下位因子の素点合計を項目数で割り単純集計した。3期の平均CNRS因子得点、職業的アイデンティティ尺度の下位因子得点、3期の平均CNRS因子得点と職業的アイデンティティ尺度の下位因子得点との相関はPearsonの相関係数を用いて分析した。統計処理は統計解析ソフトSPSS21.0J for Windowsを使用し、有意水準は5%未満とした。

8. 倫理的配慮

本研究の目的から対人関係の形成を経時的にみるため実習中に3回の調査を行うことの趣旨と方法について説明した。これらの研究への参加は自由意思であること、実習に影響がないように配慮すること、一度承諾してもやめることができ不利益を得ないこと、得られたデータは統計的に処理し、個人が特定できないようにすること、個人的評価とは関係ないこと、研究目的以外には使用しないことなどを文書及び口頭で説明し、文書により同意を得た。調査用紙は無記名とし、プライバシー保護とともに提出された調査用紙の管理に配慮した。CNRS及び職業的アイデンティティ尺度は著作者より許可を得て使用した。なお本研究は設置母体であるB法人理事長および学校長の幹部会議にて承認を得て実施した。

IV. 結果

1. 有効回答率と調査対象者の平均年齢

有効回答率は93.0% (31人) であった。調査対象者の平均年齢は 20.6 ± 0.6 歳であった。

2. CNRS因子得点の経時的変化

本研究でのCNRS因子得点の1回目、2回目、3回目の項目全体のCronbach's α 係数は、1回目0.875、2回目0.897、3回目0.875と信頼性が高いことが確認された。第1因子【人間的信頼感】の平均得点は、前期 (2.0 ± 0.4)、中期 (2.1 ± 0.4)、後期 (2.2 ± 0.4) と、実習の経過とともに上昇し、有意差を認めた ($P < 0.001$)。第2因子【威圧感】は、前期 (2.7 ± 0.3)、中期 (2.7 ± 0.4)、後期 (2.8 ± 0.3) と、実習の経過とともに上昇したが、有意差を認めなかった。一方、第3因子【専門性への信頼感】は、前期 (1.6 ± 0.6)、中期 (1.5 ± 0.6)、後期 (1.7 ± 0.5) と、前期及び中期に比べ僅かに後期が上昇したが、有意差を認めなかった (表4)。

表4 CNRS因子得点の経時的変化

因子	n=31 mean \pm SD (最小値-最大値)						有意差
	前期		中期		後期		
	受け持ち3日目		受け持ち7日目		受け持ち14日目		
人間的信頼感	2.0 \pm 0.4	(1.2-2.7)	2.1 \pm 0.4	(1.5-2.9)	2.2 \pm 0.4	(1.2-2.8)	***
威圧感	2.7 \pm 0.3	(1.8-3.0)	2.7 \pm 0.4	(1.9-3.0)	2.8 \pm 0.3	(2.0-3.0)	n.s.
専門性への信頼感	1.6 \pm 0.6	(0.8-3.0)	1.5 \pm 0.6	(0.3-2.8)	1.7 \pm 0.5	(0.7-3.0)	n.s.

Friedman検定

*** $P < 0.001$

3. CNRS因子と職業的アイデンティティ尺度の下位因子との相関

CNRS因子間の相関では、第1因子【人間的信頼感】は第2因子【威圧感】 ($r = 0.35$, $P < 0.05$)、第3因子【専門性への信頼感】 ($r = 0.81$, $P < 0.01$) との正の相関を認めた。一方、第2因子【威圧感】は第3因子【専門性への信頼感】との有意な相関を認めなかった (表5)。

表5 CNRS因子間の相関

因子	n=31		
	人間的信頼感	威圧感	専門性への信頼感
人間的信頼感	1		
威圧感	0.35*	1	
専門性への信頼感	0.81**	0.31	1

Pearsonの相関係数

表中の値は相関係数: r

* $P < 0.05$, ** $P < 0.01$

職業的アイデンティティ尺度の下位因子の平均得点は【看護職選択への自信】 (4.6 ± 1.2)、【自分の看護職観の確立】 (4.8 ± 1.3)、【看護職として必要とされることへの自負】 (4.5 ± 1.3)、【社会貢献への志向】 (5.3 ± 0.9) であった (表6)。

表6 職業的アイデンティティ尺度下位因子得点

n=31

因子	mean ± SD
【職業的アイデンティティ：看護職選択への自信】	4.62 ± 1.18
01 私は看護職を選択したことはよかったと思う	5.12 ± 1.34
02 私は看護職を生涯続けようと思っている	4.64 ± 1.45
03 私は看護職以外の仕事は考えられない	3.37 ± 1.66
04 私は看護職を志す看護学生であると他人に誇りを持っていうことができる	5.21 ± 1.19
05 私には看護職につくことが自分らしい生き方だと思う	4.39 ± 1.64
【職業的アイデンティティ：自分の看護職観の確立】	4.78 ± 1.26
06 私は看護のあり方について、自分なりの考えを持っている	4.85 ± 1.28
07 自分がどんな看護者になりたいかはっきりしている	4.73 ± 1.70
08 将来、自分らしい看護ができるようになると思う	4.82 ± 1.55
09 自分がどんな看護をしたいかははっきりしている	4.61 ± 1.35
10 私は自分らしい看護をしていくことができると思う	4.91 ± 1.33
【職業的アイデンティティ：看護職として必要とされることへの自負】	4.52 ± 1.29
11 私は看護者として患者に必要とされていると思う	4.79 ± 1.47
12 私は看護職として医療の世界で不可欠な存在であると思っている	4.79 ± 1.71
13 私は看護職として、背景に独自の学問体系を持っている	3.88 ± 1.39
14 私は看護職として、これまでも、これからも、多くの人に必要とされていると思う	4.55 ± 1.48
15 私は看護職として、医療チームの一員として、今後ますます必要とされると思う	4.58 ± 1.50
【職業的アイデンティティ：社会貢献への志向】	5.30 ± 0.88
16 私は看護職として、看護の世界の発展に貢献していきたい	4.88 ± 1.24
17 私は看護者として患者の願いに応えたいと思っている	6.21 ± 0.89
18 私は看護職として、患者に貢献していきたい	6.03 ± 0.95
19 私は看護職とした、社会に貢献していきたい	4.82 ± 1.26
20 私は看護職として医療の発展に貢献していきたい	4.58 ± 1.37

職業的アイデンティティ尺度の下位因子間での相関では、【看護職選択への自信】は【自分の看護職観の確立】($r = 0.66, P < 0.01$)、【看護職として必要とされることへの自負】($r = 0.78, P < 0.01$)、【社会貢献への志向】($r = 0.58, P < 0.01$)との正の相関を認めた。【自分の看護職観の確立】は【看護職選択への自信】($r = 0.66, P < 0.01$)、【看護職として必要とされることへの自負】($r = 0.79, P < 0.01$)、【社会貢献への志向】($r = 0.71, P < 0.01$)との正の相関を認めた。【看護職として必要とされることへの自負】は【社会貢献への志向】($r = 0.82, P < 0.01$)との正の相関を認めた(表7)。

表7 職業的アイデンティティ尺度下位因子間の相関

n=31

因子	看護職選択への自信	自分の看護職観の確立	看護職として必要とされることへの自負	社会貢献への志向
看護職選択への自信	1			
自分の看護職観の確立	0.66**	1		
看護職として必要とされることへの自負	0.78**	0.79**	1	
社会貢献への志向	0.58**	0.71**	0.82**	1

Pearsonの相関係数 表中の値は相関係数：r

** $P < 0.01$

CNRS因子と職業的アイデンティティ尺度の下位因子との相関では、CNRS第1因子【人間的信頼感】は、職業的アイデンティティ尺度の下位因子【社会貢献への志向】($r=0.37, P<0.01$)と正の相関を認めた。一方、下位因子【看護職選択への自信】、【自分の看護職観の確立】、【看護職として必要とされることへの自負】との有意な相関を認めなかった。

CNRS第3因子【専門性への信頼感】は、職業的アイデンティティ尺度の下位因子【自分の看護職観の確立】($r=0.45, P<0.01$)、【看護職として必要とされることへの自負】($r=0.44, P<0.01$)、【社会貢献への志向】($r=0.49, P<0.01$)と正の相関を認めた。一方、下位因子【看護職選択への自信】との有意な相関を認めなかった。CNRS第2因子【威圧感】は、職業的アイデンティティ尺度の下位因子すべてとの有意な相関を認めなかった(表8)。

表8 CNRS因子と職業的アイデンティティ尺度下位因子との相関

因子	n=31		
	人間的信頼感	威圧感	専門性への信頼感
看護職選択への自信	0.28	0.31	0.32
自分の看護職観の確立	0.25	0.25	0.45* *
看護職として必要とされることへの自負	0.29	0.16	0.44* *
社会貢献への志向	0.37*	0.20	0.49* *

Pearsonの相関係数 表中の値は相関係数：r
** P<0.01

V. 考察

1. 実習経過に伴う対象者—学生関係の特徴

CNRS第1因子【人間的信頼感】は、対人関係を評価する際に非常に注目される因子である。そのため実習経過に伴いどのように変化しているかを知ることは、学生の対人関係の深まりを知ることに繋がると考えられる。実習経過に伴うCNRS因子得点の経時的な変化をみると、第1因子【人間的信頼感】の得点は、実習経過に伴い有意に高まり、一方、第2因子【威圧感】の得点は実習経過に伴い徐々に低下している。これは学生が、今回の実習のねらい『看護の対象である人間の理解を深める』ことの重要性を意識した結果であると考えられる。実習経過に伴い第2因子【威圧感】の得点が低下していること、また第2因子【威圧感】が低いと第1因子【人間的信頼感】は高まることから、学生は対象者を大切に思い、謙虚な姿勢で実習に臨むことができたものと推察される。このことより実習が進むにつれて、学生は対象者との円滑な信頼関係を築くことができていると考える。したがって先行研究と同様に、学生が対象者を受け持った日から時間が経過するとともに、対象者-学生関係は好ましい方向に形成されていく¹²⁾ことが明らかになった。一方、CNRS因子のうち第3因子【専門性への信頼感】の得点は最も低く、実習経過に伴い僅かに高まっているが有意な変化は示されなかった。これは、今回の実習が初期の段階である基礎看護学実習であるため、専門性への信頼感を高めることができるまでには至っていないと推察される。しかしながら、第1因子【人間的信頼感】と第3因子【専門性への信頼感】との有意な強い関連があることから、学生が対象者との人間的信頼感を円滑に築くことができたことを実感することができるならば、看護職として専門性への信頼感を高めることができると考えられる。

以上のことより、実習経過に伴い、学生は対象者との円滑な人間的信頼関係を築くことができていると考える。また、基礎看護学実習以外の臨地実習経験を積むことにより、看護職としての専門性への信頼感が高まると考える。

2. 対象者—学生関係と職業的アイデンティティとの関連

CNRS第1因子【人間的信頼感】と職業的アイデンティティ尺度の下位因子【社会貢献への志向】、CNRS第3因子【専門性への信頼感】と職業的アイデンティティ尺度の下位因子【自分の看護職観の確立】、【看護職として必要とされることへの自負】、【社会貢献への志向】との関連が明らかになった。実習において、【人間的信頼感】を高めた学生は、「看護者として患者の願いに応えたい」「看護者として、患者に貢献していきたい」などの【社会貢献への志向】の職業的アイデンティティ形成を高める。また、【専門性への信頼感】を高めた学生は、「自分らしい看護をしていくことができる」「看護のあり方について自分なりの考えを持っている」「将来、自分らしい看護ができるようになる」などの【自分の看護職観の確立】、「患者に必要とされている」「医療の世界で不可欠な存在である」「医療チームの一員として、今後ますます必要とされる」「これまでも、これからも、多くの人に必要とされている」などの【看護職として必要とされることへの自負】、【社会貢献への志向】の職業的アイデンティティ形成を高めると考える。このように、対象者との人間的信頼関係を築く体験は、「看護者として患者の願いに応えたい」「看護者として、患者に貢献していきたい」など、学生自身の看護に対する考え方や看護のあり方を考える機会になると推察される。学生は、実習を看護師の仕事内容や自分の看護師としての適性を確認する機会と考えており^{14) 15)}、実習において、看護の対象である患者を深く理解できたという体験は、自分が看護職として必要とされていること、また、学生自身が看護職を選んで良かったと実感することに繋がり、看護師を目指す学生の職業的アイデンティティ形成に影響を与えるものと考えられる。

以上のことより、実習をとおして、学生が人間的信頼感を高めることができ、この人間的信頼感が看護実践に影響し、看護職としての専門性への信頼感を高める体験をすることが、看護職への誇りと自信に繋がり、実習後の職業的アイデンティティ形成を高めると考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

今回の研究をとおして、学生が実習中に対象者との人間的信頼関係を形成していく過程を、CNRSを用いて、量的に追跡することができた。また、実習事前指導は、実習からの学びに影響を与え、実習からの学びが高いほど、実習後の職業的アイデンティティ形成に影響を与える¹⁶⁾ことが推察されるため、今後は、学生が実習において良好な対象者—学生関係を構築できるよう、併せて実習事前指導の内容及び指導方法を検討することが課題である。なお本研究は、高等学校看護専攻科（5年一貫教育）4年生を対象に集団としての特徴を調査したものであるが、調査対象者数が少なく結果を一般化するには限界がある。今後は調査対象者数を増やし検討を重ねたい。

VII. 結論

学生と対象者との人間関係が職業的アイデンティティに及ぼす影響については、以下のことが明らかになった。

1. 学生は対象者と人間的信頼関係を築くことができた。
2. 人間的信頼関係は看護職としての専門性への信頼感を高める。
3. 学生が対象者との人間的信頼関係を築くことができたならば職業的アイデンティティを高めることが示唆された。

【引用文献】

- 1) 日本看護師協会「2017年病院看護実態調査」結果報告。2018：公益社団法人日本看護協会 広報部 New Release, 2018年5月2日リリース。
- 2) 波多野梗子・小野寺杜紀：看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化，日本看護研究学会雑誌，16(14)，p21-28, 1993。

- 3) 日本看護協会政策企画部編：2005年病院における看護職員需給状況調査，日本看護協会出版会，p8-9，2008.
- 4) マイマイティ・パリダ・紙屋克子・本多陽子，他：臨床実習直前指導が看護学生の職業的アイデンティティに及ぼす影響，茨城県立医療大学紀要，11，p13-21，2006.
- 5) 高木永子：臨床実習前の学生に対する実習指導者の役割，ナースプラスワン，5，p64-69，1991.
- 6) マイマイティ・パリダ・紙屋克子・本多陽子，他：臨床実習直前指導が実習への姿勢と実習後の職業的アイデンティティに及ぼす影響，茨城県立医療大学紀要，11，p55-64，2006.
- 7) 文部科学省：看護学教育の在り方に関する検討会報告－看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標－，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chosa/koutou/018-15/toushin/4032601/004.htm（閲覧日2020年6月）
- 8) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討報告書，<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/r-9852000001310q-att/2r-9852000001314m.pdf>（閲覧日2020年2月）
- 9) 柴田早苗，松本賢哉：医療系学生の携帯電話メールへの依存状態と対面によるコミュニケーション能力との関連，日本看護学教育学会誌，21(2)，p25-33，2011.
- 10) 黒髪恵・須崎しのぶ・佐久間良子，他：基礎看護学実習での受け持ち患者との人間関係形成に対する学生の思い，第36回日本看護学会論文集（看護教育），p152-154，2005.
- 11) 深井喜代子・新見明子・大倉美穂：対象－患者関係評価尺度（CNRS）の開発，川崎医療福祉学会誌，10(2)，p285-291，2000.
- 12) 深井喜代子・新見明子・田中美穂：臨床実習中の患者－看護学生関係の対象－看護者関係評価尺度（CNRS）による分析，川崎医療福祉学会誌，5(2)，p87-94，1995.
- 13) 藤井恭子・野々村典子・鈴木純恵，他：医療系学生における職業的アイデンティティの分析，茨城県立医療大学紀要，7，p69-77，2002.
- 14) 落合幸子・紙屋克子・野々村典子，他：教師からの授業メッセージと職業的アイデンティティとの関連，茨城県立医療大学紀要，8，69-77，2003.
- 15) 前田明子：看護学臨地実習における教師の指導行動と学生の看護職同一性形成の関連指導に対する教師自身と学生の評価を用いて，天使大学紀要，2，1-12，2002.
- 16) 上田雪子・橋本茂子・木部泉，基礎看護学実習における実習事前指導が実習からの学びと職業的アイデンティティに与える影響，看護・保健科学研究誌，第15巻，第1号（通巻19），p28-37，2014.

The influence the human relations with the student and the patient exert on a professional identity

Yukiko Ueda

The purpose of this research is to investigate the influence a relation with student's patient exerts on a professional identity. As a result, the next became clear.

1. A student could build human relationship of mutual trust with a patient.
2. Human relationship of mutual trust raises the trust to the specialty as nursing work.
3. If a student can build human relationship of mutual trust with a patient, a professional identity is raised.

Key Words: Patient and student, Professional identity, Client-Nurse Relationship Scale (CNRS)